

紙つぶて

日本の小学校では鉛筆と消しゴムが定番だが、イタリアでは普段、主にボールペンを使う。間違えても消せないから、方眼ノートは書き直しだらけ。お世辞にもきれいとは言えないが、それぞれに味のある、自分だけのノートが出来上がる。

間違いを消して正しい答えを書き残すのではなく、間違いを含めて思考のプロセスを残すことに主眼を置く。ところが、消せるボールペンの登場によって子どもたちのノート作りは様変わりしたようだ。

とはいえ、授業の進め方は面白くて、例えば算数の授業では「二足す三は」ではなく「五になるには何と何を足せばよいか」と質問する。あ

小学生のノート作り

武田 好

る生徒が「一足す四」と答えるのを、競い合って別の生徒が「三足す二」と答える。人と異なる答えを見つけて出すことが楽しいのだ。

同時に「レーゴリ」と呼ぶ色ブロックを使って、二のブロックは一倍の容積があることを、色（視覚）と手触り（触覚）で楽しませる。

さらに足し算を絵で表現させる。「二足す三」なら、数字の替わりに二匹の虫と三つの花を考え出して、数式を描く。モチーフ、色、形、大きさは自由で、個々の発想に任される。イタリアでは算数をデザインさせるのかと目を疑った。

正解の記録より、解答に至るまでのストーリーを図案化することに時間を割く。理論を可視化するノート作りと言えば、言いすぎだろうか。

（静岡文化芸術大教授）

2020.4.4

2020.4.4

中日新聞（夕刊）P.1